

ふるさと「霞ヶ浦を中心とした周辺地域の歴史・文化の再発見と創造を考える」

ふるさと、風

第92号（2014年1月）

風に吹かれて（70）

白井啓治

『風もなく穏やかな陽ざしは御元日』

一年の計は元日に：と言うが、はてさて今年はいったい何を計ればいいのか。どうもやりたい事が年々が増えて来ている様である。これは先の短い事を思っただけ欲張るだけ欲張ってやろう、ということなのだろうか。

欲張ると言っても小生、それ程強い物欲がある訳ではなく、何とか食えていればそれで良いと思っっている。不味いものは食べないが、好き嫌いはない。美味しい物が食べられるかどうかはこちらの創造力・発想力次第でどうにでも料理できるのだから、どんな食材であつても有ればそれで良い。名誉欲もゼロとは言わないが、無い。

じゃあなんでそんなに欲張っているのかと思われるだろう。まあ、格好をつけて言うならば、折角親に貰った命だから精一杯に自分の人生を過ごしたい、という事になる。

人間、寿命はそれぞれに違うが、長く生きたくらと言っただけ沢山のことがやれるのかと言え、若くして寿命を終えた人と大して変わるものではない。死を目前にして、もつといういろいろやりたかったのにという思いの長けは長寿も夭折も

変わるものではない。

そんな事が解かっているが年々欲深くなってくるのは、対岸をのぞめる歳になって来たという事なのだろう。何時頃、誰が評論したのかも記憶は定かではないが、谷崎潤一郎氏を評する文に、谷崎氏の文学は己の対岸をみられるようにならないと書けない小説である、というのがあつた。今、何となくその評論に納得することが出来る。

この会報「ふるさと風」も、今年九月、百号を迎える事となる。百号というと八年と四ヶ月。何を見ても長続きのしないこの石岡と言う町にあつてはよくぞ続いて来たものだと思う。

ふるさと風の会を始めるきっかけを作ってくれた打田昇三兄とは、小生が石岡に越してきて間もなくの二〇〇三年十月以来のお付き合いで、もう十年になる。石岡に越してきて、打田兄と出会う事が無ければ、このふるさと風も兄妹の劇団ことば座も生まれてこなかったし、小生も此処を終の地にする事もなかっただろうと思う。それこそ対岸を見る事によって始まった因縁と言えよう。

そんなわけで、今年も計るものと言えばこの会報「ふるさと風」と「ことば座」の継続という事になる。

始めるときに、小生としては十年を一区切りとして、それまでは責任を持って進めようとスター

トしたのであつた。十年が過ぎたら、誰かに編集のバトンをタッチして、投稿だけにしてもらおうと考えている。十年と言うと百二十号であるが、それまでは何とか出来るだろうと思っている。

ところで、新聞等のペーパー形式の刊行物もなくなるとは言われていた。確かに、ニュースと言う側面だけを見れば新聞形式の活字文化は消えゆく運命にあるのだろうと思う。それは小説や詩歌にも言えるだろう。実際、現在の自分を見ても、必要と思う資料の殆どはネットから得ているのだから。

この先、活字のネット化はもつともっと進んで行くことだろう。自分自身を振り返っても、年を取るにしたがつてネットの利便さには身にしみて感じている。

このふるさと風も十年を迎える頃には、ネット配信となつているかも知れない。現在もホームページには毎月載せてはいる。

印刷と言う活字文化が消えゆく事を悲しむ人もいるかもしれないが、文字の表現文化が無くなる訳ではない。印刷物と言う嵩張る持ち物が無くなるだけのことである。それこそスマートフォンがあればすべて事足りるのであるから、技術の進歩とは有り難いものである。

2000年の時に、「2000年間で最大の発明は何か」という本が出版され、そこには多くの人が印刷機・印刷技術と答えられていたが、コンピュータによる通信技術の出現で活字文化の形態が大きく変わってきた。印刷技術も今は3D印刷なるものが出現し、印刷とは平面に刷るものと言う概念から大きく離れてきた。

ことある毎に書いてきたが、進歩とは一所に留

まらないことを言う。一所に留まらないと言うのは、常に現状を突き破って進むという事である。

伝統の文化・芸術を守り継承していくと言うのも因習と言う芸術の足を引っ張る邪魔ものを打ち破って変化させないと残ってはいかないものである。しかし、現状を変化させるという事は大変なことである。現状を変化させることの最も大変なことは、現状に利食している奴等を如何にして退治するかという事だろう。

街が衰退していく、地方が衰退していくと言うのはそこには既成を利食している者、因習を利食している者が大勢いるという事に他ならない。当ふるさと風の会は、既成に胡坐をかくことを放棄した者達の集まりである。だから、この会報を出し続けている間は、それぞれ自分の思うところ、考えるところを誰に憚ることなく確りと声に主張していきたいと思っている。

「一年の計は…」と問うた時、今年も確り自分を声にしよという事になろう。

雑感(七月)(3)

菅原茂美

⑨トリプルパンチ

「老爺心」と言われるかもしれないが、政治・経済等、東京一極集中には、大きなリスクを伴う。首都機能移転の話は、筑波など一部は実現した。しかし、あの聡明な前東京都知事の石原氏は、首都移転論には真つ向反対であった。首都直下型地震でライフラインがずたずたなどあれば、どう対応するつもりなのか。もっと大局観でものを考え

るべきであろう。

首都機能分散については、日本の将来のために、英断を奮うべきである。都知事がなんと云おうが、政府は未来を深く読み、後顧に憂いを残さぬよう、必要なものは直ちに実行に移すべきである。

火山列島の日本は、何百年に一度か、「巨大地震・津波・火山噴火」は、トリプルのセットで襲来する。869年、マグニチュード8.4の「貞観地震」と巨大地震。それに前後して、十数年の間に富士山・鳥海山など次々噴火。平安前期は、日本列島は攪乱状態であった。地層にそれが、明確に刻印されている。

それゆえ巨大な災害等あれば、社会に重大な影響を及ぼす「原発」などは、それに対応できる十分な準備の上、ゴーサインを出すべきであった。目先の利益追求に目がくらみ、慎重な科学者の意見を無視した推進派は、強引に事業を進めた。その結果が福島悲劇をもたらした。

どうしても国力維持のため原発が必要ならば、それらの巨大災害を乗り越える完璧な対応策を講じた上で、新設なり再稼働すればよい。

原発推進上、絶対に欠かせないのは、小泉元首相が言うように核燃料廃棄物の最終処分場の確保である。火山噴火など心配のない、地下300メートルに「地層処分」する案だ。日本でも14年度から北海道で予備実験を始めるようだが、北欧フィンランド・スウェーデンで、すでに着手している。

さて、発電量30%だった原発をゼロにするためにはその論拠を明確にしなければならぬ。代替えの自然エネルギー発電は1%そこそこである。化石燃料輸入増加は、ホルムズ海峡・マラッカ海峡など、いつ何が起きるか分からない。かつての

石油ショック再来をどう凌ぐか。そして温暖化ガス増加をどう防ぐか。地球温暖化が進めば、中緯度地帯でマラリア等熱帯病流行を防ぎきれない。年間4兆円近い化石燃料費増加による国富損失をどう処理するか。電気料金値上げに中小企業や家庭が耐えきれぬか。産業の空洞化をどう防ぐか。節電による熱中症の悲劇など問題点は無数。

物事は、国家の安定運営をまず念頭に、頭を冷やして、トータルで判断しなければならない。

話を戻し、一極集中のリスクだが、日本の宿命とも言うべきトリプルパンチの他に最近地球温暖化の影響か、ゲリラ豪雨・巨大竜巻・強力台風連発など、人口密集地にこれらが重複襲来したら、都市機能はマヒ状態に陥ること間違いなし。

13年11月、フィリピンで、観測史上最大の台風(895ヘクトパスカル)が襲来。莫大な死者を出した。4メートルの高波は津波と同じ。地球温暖化の弊害は、急速に押し寄せてきている。

近代化した今日は、さらに大停電・悪性伝染病の蔓延・考えたくはないが、テロの発生など同時多発したら、それはそれは目も当てられない窮状に陥るに相違ない。伝染病の蔓延は、人口集中地帯ほど被害が大きい。東アジアに悪性のインフルエンザなど発生があれば、日中韓外交がギクシャクなどしている場合ではない。一刻を争う話だ。

近年、人体の急速な抵抗力の低下と抗生剤の乱用による多剤耐性菌の出現により、悪性伝染病が発生したら、医学の進歩した今日でも、到底防ぎきれない。伝染病の蔓延防止という、ただ一点から見ても、人口の集中は避け、分散すべきである。

大都市は地表面が込み入っていると、建物は上空へと無限に伸びる。そして、地下鉄や地下商店

街など、巨大地震と津波・台風・豪雨がセットで襲来したら、断層ができるくらいだから、上下水道・排水溝など必ずどこかが破綻。電線は地上・地下関係なく、必ずあちこちで断線停電。地下街に侵入した水は、ポンプアップなど、到底間に合わない。電力が寸断されたら、どうやって充滿した水を外に掻き出すのか。超巨大な貯水槽を地下に作れるのか。水を捨てようにも、川は満水のはずだ。自家発電といっても限度がある。無数の溺死者。考えただけでも恐ろしくなる。

こんなことが見え見えなのに、政府は、英断を下せない。既得権が幅を利かす。少なくとも政治家は、俺が担当している間はそんなトリプルパンチなど来るはずがない。俺が辞めた後、死んだ後の事など知るもんか……これでは、無責任すぎる。高層ビルや高深度地下街に人口が溢れる巨大都市は、巨大災害が重複して来襲したら一たまりもなからう。対策は「人口分散」の一語に尽きる。

諸悪の根源は「人口過剰」にある。日本列島に縄文人は10万人いた。しかし大陸から難民の弥生人が100万人も一気に押し寄せてきた。縄文人骨4000体を精査したところ、戦いに由来する傷痕は見られないが、弥生人骨には、それが非常に多い。結核によるカリエス痕は、弥生人には無数にあるが、縄文人骨にはないという。

日本には「少子化相」がいて、人口減に歯止めをかけようとしているが、人口過剰がストレスや軋轢を生み、健康を害し、ひいては戦争につながり、資源を求めて、他国侵略を謀る。今日、70億人の人口を養うには地球が14個必要とのこと。

絶海の孤島でバッタが異常繁殖すると、草を食べつくし、新天地を求めて一斉に島を飛び立ち、

海で集団自殺しながらとのこと。政府は適正人口と、一極集中を避け、安定国家を目指せ！

関東大震災の後、議会や多くの反対を押し切つて、東京市長・後藤新平は、壮大な構想を実現した。それが百年後の今日、大いに機能を發揮している。政治家は、常に百年・千年先を読んで決断すべきである。

⑩オジギ草が異常繁殖

異常気象のせいなのか、最近、お辞儀草が猛繁殖。テレビを見れば、毎日どこかの社長など幹部が、記者会見の席で、『二度とこのよう……』と深々頭を下げ、お辞儀ばかりしている。正にオジギ草の異常繁殖である。

しかも場末の小さな町工場の社長なら、生き残るのにやむを得なかったのか……と同情もしたくなるが、現実は何んと超一流のホテルやデパートの老舗が、次々と悪事を働いている。既に名をなした大店が、庶民を騙し、ずる賢く、あぶく銭を稼ごうとするその心根が許せない。正にモラルハザードだ。しかし、その根底には、消費者の見栄なのかブランド志向が強く、高額でも、より名の通った物へ傾く心理を巧みに利用している。こんな醜態を引き起こした要因は、消費者にもある。

メニューの「クルマエビ」はブラックタイガー。

JR北海道も、度重なる事故を謝罪し、幹部が深々とお辞儀を繰り返した。レールの幅の検査を、何年間も実施していなかったという。それを「失念」のため……とか。鉄道事業法による立ち入り検査前に、測定データを改竄までしたという。カーブの外側のレールは巨大な遠心力のため、少しずつ外側に広がっていくのだという。それを常時修正しなかったら、いつかは脱線・転覆は避けられない。

い。JRの「指差し確認」は、確かに意義のあること。しかし、「心ここに在らざれば、視れども見えず」。社員の再教育が必要だ。

楽天の日本シリーズ優勝は、被災東北を元気づけるため真に結構であった。しかしその後がいけない。楽天のネット記念販売で、シュークリーム10個を本来12000円なのに星野監督の背番号から77%引き、2600円で販売するときもんだ。これでは通常の値段となら変わらない。

茨城産の常陸牛が、松坂でちよつと肥育すれば「松坂牛」に早変わり。オーストラリア産の赤肉に、牛脂を注入した加工肉が、霜降りの「和牛」に化ける。加工肉Ⅱ成形肉は、それはそれで結構なもの。ホテルやデパートなど、社会正義感があるのなら、はつきり加工肉ですよ！と断ればよい。それを姑息にも老舗の大店が、客が分からなければ儲けもの……と、何年間も、偽装を続ける。正に「性悪説」の独壇場だ。

あれほどの地震・津波の後でも、日本人は商店から商品略奪をしなかったと、世界からその倫理観の高さを称賛されているというのに、大企業がこの始末。日本一流のホテル・デパートの謝罪記者会見など見たくない。本当に情けなくなる。

「馳走」とは客をもてなすため畑に走ることから来ているという。走りもしないで偽物を右から左に動かすだけで金儲け。日本の接客精神やいずこ。「日本食」が、ユネスコの無形文化遺産に登録されようとする矢先、こんな事でどうするの？例をあげたらキリがないが、血圧降下剤は、その目的は十分に果たしているが、更に他の効果も併せ持つ……とか、十分な検証もせずに、他のメーカーの同類薬品より、広範囲に有効等と嘘をつく。

白亜の殿堂のエコノミックアニマルの醜さ。

更に、日本のメガバンクが、「信販会社等の調査を信用し：」などと記者会見で言い逃れをしているが、反社会勢力への融資を長年続けていた。頭を下げようが土下座して謝ろうが、企業は組織が大きくなるほど、己に厳しくなければならぬ。

ついでだからもう一言。名の通った一流企業のクール宅急便が、宅配されたら冷たくなかったというし、名の通った老舗の吟醸酒が、アルコールを加えた「偽酒」と来ては、飲んべえも、ウカウカ素面（しらふ）では、酒も飲めない。

また「偽質屋」では、安物に何十万円も金を貸し、年金手帳をヒツタクリ、たつぷりと稼ぎまくる。日本も廃れたもんだ。

⑩ 「使い捨ての乗り物」

皆さんこんなテーマから何を連想されますか？これは、「雑感（こも）も」などという、軽薄はタイトルからは想像もつかない、重大な意味を持つ。

即ち「使い捨ての乗り物」とは、全ての生物の生きざまは、「生命活動設計図（＝DNA）の単なる運び屋」に過ぎない：という事。我々生き物はDNAというただの物質が、己の「コピーを増やしたい」という下心に支配され、苦勞してこの世で生命活動を余儀なくされている。縄張り争いや戦争までしても、何が何でも命を繋ごうとする。虫でも雑草でも人でも生命の鎖が切れないよう、奉仕させられている。幸い生き残り、DNAという物質の鎖が途切れることなく、次世代にそのコピー伝達が完了して不要になれば、「おさらば……」と簡単に使い捨てにされる。夫婦で駕籠（かご）をかつがされ、客（子供＝DNA）が一人前になるまで走りまわり、子が次の駕籠昇き（かごかき）

に成長した頃、用がすめば捨てられる。

*DNAとは、神なのか、悪魔なのか？

とにかく今から40億年前、生命がこの世に現れその身を永続するために、あらゆる方法（進化等）を使って、己の鎖が切れることがないよう、生き物を奴隷のように駆使してきた。考えてみれば、人生とは、そういう身勝手な「主」の奴隷のようなもので、これを讃えるか、アホらしいと考えるかは、各自の自由というもの。

唯物論的すぎる：といわれるかもしれないが、人生のすべては、一つ一つの細胞の中に鎮座するDNAの命令により生命活動を強いられ、DNAが「己のコピーを安全に増やしたい：」という欲望に支配されている。どんな高尚な哲学も、一個一個の細胞の生化学反応の結果である。そのため、生命を無事に続けるためには手段を選ばず、最悪は戦争さえ拒まない。原始生命が周りからコピー増産のための栄養を摂取する原理は、進化を遂げた現代人も理屈は同じ。恋の奴隷も権力欲も拝金主義も、命の永続を求める基本原理は、皆同じ。

さて、我々人類をしみじみ眺めてみると、大変偉大な文明を築いたり、どの世紀においても、戦争がなかった時代などなかったほどに愚かな事案に全力投球をする。激しい恋をしてみたり、同じ相手を、殺したくなるほど憎んでみたり。あるいは自分の命を奉げて他人を生かしたり、逆に人の命を奪ったり。真に千変万化。これらはいずれも、我々の細胞の中に大事にしまい込まれているDNAの仕業なのである。

DNAは、その生物の構造や機能の設計図である。即ち哺乳類なら、まず卵子と精子が合体し、両親から受け継いだ遺伝子をシャッフルし、新た

な自分という新個体の独自の生命体が誕生する。

生まれる子供は、両親から半分ずつ遺伝子を貰うが、必ず平等に分配され、平等に機能するとは限らない。相同遺伝子（例えば鼻の高さ）は、同等に働けば父母の中間の高さとなる。しかし、実際は両親のどちらかから来た遺伝子が強く働き、より母似、或いは父似となる。たとえば、母方の遺伝子が強く、父方の遺伝子は抑え込まれ、いわば一生、父方の遺伝子は目の目を見ずに眠らされたままの事もある。しかし、眠らされた遺伝子は、永遠に機能を失ったのではなく、ただ休眠しているだけ。それゆえ、孫や次の世代になると、父方の眠らされていた遺伝子が威張りだして、強力にその機能を発揮し、父は祖父に似なかったが孫は祖父にそっくりなどという現象が現れたりする。（これを「先祖返り」又は「隔世遺伝」という）。ヒトの6本指・副乳・多毛症などがそれである。

受精の時の遺伝子のシャッフルは、全く無作為に行われるので、姉は母に似て美人だが、妹は父に似てそれほどでもなかった：などという結果になる。即ち、同じ親から生まれた兄弟姉妹でも、遺伝子の活動は全くメチャクチャなので、表現型は色々。三毛猫の皮膚細胞の核を受精卵に入れ替え、培養・受胎したら、当然親そっくりの毛色の子猫になるはずなのに、毛の色を決める遺伝子は100個もあり、発生過程でどの遺伝子が先に活動するかにより、全く違った毛色の子猫が生まれる。

クローンでさえこうなのだから、兄弟姉妹は、全く違った表現型となるのは仕様がなない。もし病気になるやすい体質など、要らざることが強く遺伝した場合、これは神様を恨むほかない。

冷めた目で人生を眺めると、DNAという物質

に「魂」があるかどうかは知らないが、よくもこれほどまでに生物を支配するものだ。「雑草」だろうが「人類」だろうが、細胞の中のDNAという利己的に働く遺伝子により、周りから栄養となるものを掠め取り、己の子孫繁栄のために休むことなく踊らされる道化師のような存在。繁殖能力が低下すれば、ほいきたさつさと捨てられる。

折角大脳を膨らまし、農耕牧畜で栄養を確保し、種族繁栄のために戦争までして働きつめたのは、一体誰の為なのか？ 「進化」とは、DNAの安全増殖のための深慮遠謀なのか？

人生をいかに美化しても、利己的に生き抜こうとするDNAの策謀から人は永遠に逃れる事はできそうにない。その証拠は、毎年8500万人ずつ増え続ける世界人口。醜い縄張り争い。絶えることのない戦争。全ての生物はDNAの激情に翻弄され、増殖に歯止めが利かない。人類に「智慧」というものがあるのなら、DNAの奴隷を脱却し、生命の運び屋だけではなく、人間らしく、しっかりと未来を見つめる眼を持ちたいものである。

考える力

木村 進

明けましておめでとうございます。

この風の会に参加して二度目の正月を迎えました。他のベテラン会員の皆様に支えられて何とか1年を無事過ごすことが出来ましたことを感謝申し上げます。

今年の目標は是非ともこの会への若い参加者（会員）を増やすことですが、これが結構難題です。私は文章を書くことはあまり好きではなかったが、

3年前に始めたブログを毎日更新しているうちに文章の楽しさを味わうことができるようになった。そして自分の文章の拙さを実感し少しはまともな文章を書くことが出来るようになった。この会に入会させてもらった。

この風の会のベテラン会員の方はそれぞれ个性的でしっかりと自分の意見を書かれておりとても参考にはなるが、私にはまだまだとても足元にも及ばない。これからも他の会員の足を引っ張らないようにしながら少しでも成長できれば良いと願っている。

さて、今回は以前にブログ「まほらの風に乗って」に載せた文章に少し手直しを加えて改めて掲載させていただきたい。前にお読みいただいた方には一部重複内容となるがご許し願いたい。

《考える力について》

パスカルは「人間は考える葦である」といった。葦は風に逆らわずしなやかに反って強風をかわし、またしっかりと立ち上がる。こんな姿を人間の姿に例えたものというが、本当のところはわからない。葦は手でも折ることだってできる。

日本の国は「葦原中国（あしはらのなかつくに）」と日本神話では表現されている。

葦原中国とは高天原と黄泉の国（死者の国）とを結ぶ中間に存在する国で、それは現実の日本国のことだと解釈されている。昔から日本には葦がたくさん生えていたのだろう。

常陸風土記でも利根川から霞ヶ浦沿いの信太郎あたりの地帯に同じ表現が使われている。

パスカルの表現では、葦は葦でも、人間は考える葦であるという。考えるから人間なのであって、

考えないのは人間ではないということだろう。

これは文章を書くことでも同じことが言える。人は字や文章を書くことが出来るが他の動物には出来ない。少し極端だが、物を書かなくなれば動物と同じだという。

昔、「サルにもわかるパソコン入門？」などという本があった。なんとかその時は毎週のようにパソコンショップに足を運んで最新情報を知り、操作にも慣れ自分のものとして習得するまでになった。しかし、今では街に出ればスマートフォンが氾濫している。これでは年寄りも時代の流れについていけない。困ったものだ。

この情報があふれる時代にどの様な人間が本当に必要とされているのだろうか。それは「考える力」がキーワードになると思う。

上野に西洋美術館がある。これは松方コレクションを譲り受けて開設された美術館だが、この庭にロダンの彫刻がいくつか置かれている。よく知られた「考える人」がすぐに目に飛び込んでくる。この考える人とは何を考えているのか？

この考える人の像の近くには、同じくロダンの「地獄門」というブロンズの門が置かれている。ここに苦悩する人々などが描かれ、その門の上部にこの考える人と同じ小さな像が置かれている。

この門には「ここを通る者は一切の望みを捨てよ」とあるそうだが、ロダンは考える人だけを別にまた作って「詩人」と名づけた。

人間は考える動物だが、考える込む人は詩人なのだ。さて、考えても結論が出ないときはどうしたらよいか？

そんなことは簡単だ。分からなければ分からなくてもいい。考えることが大切だ。分からなければ

ば知りたいたいと思い、調べたり、教えを乞うたりすればよい。

でもここで肝心なのは自分の考えでそれを理解し、決して鵜呑みにしないことだ。それが考えることだ。知識をたくさん持つてもそれは情報をたくさん知っただけである。他人の考えを聞いて、考えもせずに鵜呑みにしたのでは考えたってちっとも面白くない。

現在小学校などでの情報教育ではインターネットの使い方などが教えられているのだから、パソコンで何でも分かるはずもない。更に深く知りたければ本を読み、辞書を引かなければならない。その辞書が電子辞書となって持ち歩きは大変便利となったがこれは更に奥にある事象を理解するにはあまり適していない。デジタルの良さは検索するスピードとその情報量だが、あまり深く考えさせるには適していない。適していないというのは少し語弊がありこの情報量の捕らえ方がその人間の考える力によってかなり差が出る。同じ情報を得ても表面だけを読んで知った気になってしまえば考えないことになる。

テレビのクイズ番組などは知的とはいえない。単なる娯楽に過ぎない。知らないこともたくさん出てくるが、この人は知識の豊富な人だとか、お馬鹿な人だなどと思うのも娯楽のうちだ。ここで得た知識も私には右から左に流れていくだけだ。インターネットも検索すればたくさん情報があふれている。間違った情報もあれば、また偏った解釈で書かれた情報もある。これらの情報を取捨選択し、更にもっと奥に眠っている事象を考えるのが楽しいのである。

最近の子供への教育も少し気になることが多い。

あまり成績の芳しくない子供たちはすぐに答えを求める傾向にある。算数問題で足し算をして答えが合わない、考えもせずすぐに引き算をしたり掛け算を機械的にやろうとする子供が多くなったという。

これはまさにゲームの世界で通用するのであって、現実の世界では通用しない。偶然できたとしても応用は出来ない。

一般に、出来る子は教え方さえ教えれば自分から勉強を進められる。でも出来ない子は全て教えてもらった勉強をやった気になる。そしてその子供の多くの親はこれが分からないからたくさん教えてくれる塾や学校の先生が良い先生だと思ってしまう。塾の側からしてみれば、頭の良い生徒のみを教える方が楽で、同じ授業をしても出来ない生徒はいつまでたつてもできないので、時間を余分ににかけて教えることになる。これは多少の進歩は見られるがなかなかここから脱却できない。親から見れば熱心な先生だとなるのだが、それらの子供たちは答えを欲し、考え方を習得しようとはしないのが実情である。

さて、もう一つ福沢諭吉が書いている「人の独立」ということを少し紹介しよう。

福沢諭吉は、福翁百話とは別に「福翁百餘話」として19編の話を書いている。この中に、その最初の章に「人生の独立」ということが書かれている。その内容を大雑把に要約すると：

「人生の独立などと文字で書けば難しそうだが、深い意味はない。他人に厄介にならないことに過ぎない。父母の手を離れて一人前の成人男女となったならば、他人はもちろん自分の両親に対してもこれを煩はすのは独立の本位に背くものだ。こ

の独立には心の独立と、身体の独立の二つのものがある。「身体の独立」とは親や他人の物質的な援助を受けずに、自分の力で解決していくことであり、「心の独立」とは、社会の処世において自分の考えを持ち、それを言い行つて満腔豁然(まんこうかつぜん)洗うが如くにして秋毫(しゅうごう)の微も節を屈することがない姿を言う。」

…とある。しかし、この心の独立を成し遂げるには、まず身体の独立が先になされていなければならないとも書かれている。

要は、親を含め他人に衣食住の世話になつていては、いくら自分の考え方を主張しても心の独立は得られないというのです。まあ、生まれながらに人は平等というが、この国の政治はちつとも平等ではない。アベノミクスでマネーゲームや利権がらみで「心の独立」が蔑ろにされるなどということが無いことを願うばかりである。

年の初めに

兼平智恵子

ぼっくり ぼっくり幸せの足音

智恵子

明けまして二〇一四年新としのお慶びを申し上げます。皆様にはお健やかに幸多き新春をお迎える事と存じます。

昨年中は当「ふるさと風」をご愛読頂き、ご指導ご支援下さいまして誠に有り難うございました。今年もどうぞ宜しくご指導の程お願い致します。

昨年も自然災害が多く尊い命が奪われてしまいました。最近の頻繁に起こる地震が薄れていく災

害の恐ろしさの警鐘となり、備えを心するこの頃です。

そして誇れる喜びもありました。二〇二〇年東京五輪とパリンピック開催の決定。富士山の世界文化遺産登録。日本の食文化である「和食」が無形文化遺産に登録されました。午年の今年にも沢山の喜びを運んでくれることでしょう。

古代、馬は人力を超える能力を秘めるものとして、また神が乗る神馬として崇拜され神事や祈願に奉納され、また雨乞いや暴風雨を鎮める呪術儀礼として献上されたと言う。また生き馬では大変なので木や板で馬形にして献上したり、板に絵を描いて奉納するようになりました。絵馬奉納は奈良時代に行われていたという。古くは神仏習合思想が広まった平安の頃には絵馬が一般的になり寺院にも奉納されるようになり、江戸後期には小絵馬(小さな板に絵を描いた)奉納が盛んになりました。馬は古来より人間と深い関わりをもつ動物で性格は温和で力が強く、走るのが早い。北アメリカが起源で家畜化されたのは新石器以降で日本では五世紀中頃から普及。近年ではホースセプター(馬と接する事によって心身を癒す)で注目されているそうです。この一年が皆様にとっても穏やかで、幸多き年でありますようお願いいたします。

当会報にて一昨年十一月より、そして昨年と紹介してきました石岡のおまつりで華やかさを誇る山車の上に乗る人形について、十二町内の皆様には色々のご無理なお願いやご迷惑をお掛けしてしまいました。ご協力誠に有り難うございました。市民の誇り”石岡のおまつり”と題して、昨年年番町の守横町の櫻井様書かれております。

このお祭りには、祭事の発祥である神への祈り

がこめられ、宗教的な荘厳さが伝えられています。伝承文化のもつ神秘性に支えられた大祭を心の誇りとして改めて認識するいつ時でもあります。遠き歴史に思いをはせ、現世に生きる喜びを素直に表現し、すべての人が参加して楽しむという心を大切に後世に伝えるのも年番の責任であると考えます。

「一年の始まりは祭り」と謳う石岡の皆様の祭りに対する誇りを知ることが出来ました。今年も旧石岡地区を中心に歴史や伝統などを学び皆様に紹介して行きたいと思えます。

夢

伊東弓子

一ヶ月前のことだった。晩秋も初冬も入り乱れていた季節。ガラス戸のキャンバスから見える景色は、すっかりと色褪せていた。

夜通しかけて仕上げなければならぬ仕事があった。一眠りしてもいい恰好を始めた作業も思うように進まなかった。ふと一年前の夫のことを思い出していた。あの頃夫の体の中では、どんな病がすすんでいたのではないかと。じつと我慢していたのではないかと。と気付くのが遅かった自分を悔んでいた。それにしても亡くなつて十ヶ月になるのに夢にも出てこないがどうしたのだろう。私を忘れたかな。まあまあよくやっていると安心してきているのかな。等と北叟笑んでいた。

何時の間に夜になったのだろう。辺りが暗い。まだそんな時間じゃない。戸は全部開いている。

雨にも気がつかなかったが庭に水溜りがある。私を呼ぶ声があった。

「オーイ、助けてくれ。手をかしてくれ」

という声だ。飛んで行くと夫が昼寝をしていた所から、座布団や毛布と一緒に軒下に転がっていた。跣で水溜りに入って、夫を起こそうとして引き上げた力が入らない。部屋に上げることも出来ない。「ごめんね。ごめんね」と何度も上げようとしている中に目が覚めた。

作業の途中居眠りをし一睡の夢の中で、寒気を感じ我に戻ったのだった。

夫は私に何か訴えようとしたのか気になった。夢の中の夫が昼寝をした所は、今佛壇を置いてある所だった。その前で暫く夫に近況報告をしていると涙が止めどもなく出てきた。一人っきりの部屋で線香の煙に包まれて声をあげて泣いた。

世間でよく聞く話の中に、亡くなった人に申し訳ない事をしたと思っていると夢に現われる。ちよいちよい夢に出てくるようなら何かある。滅多にみないような相手も安心してるんだから心配ない。とよく聞くので心にはとめておこう。

水に纏わる夢も幾つかある。走って行ってやれやれ間にあつてよかつたと安心して用を済ませたところお寝小をしてしまった小学四年生の時の恥ずかしい夢、集団生活に入って友達が出来て遊び放題の頃、運動場西の下り坂の所に松林(今は駐在所があつて、その坂の降り口に天水桶(當時はない)があつて、水底におはじきが沢山散らばっていた。お日さまの光りを受けてその色の一つ一つが美しい。水が揺れて変わる輝きが忘れられない。いま私を美の世界に案内してくれるのは、あの夢の輝きが入口になっているのかも知れない。底は余り

深くない筈なのに手が届かない。お尻を持ち上げ逆さになって手を伸ばしても掴めなかった。一つも掴めない悔しさと顔に水がついたところで目が覚めた。忘れられない夢の一つだ。

直ぐ忘れてしまう夢もあるが、繰り返してみることがある。水の中というより水の上を歩いている私がある。始めは幼い私だったが、この頃は今の私の姿のようだ。沈まないでどんどん行く。大丈夫だと思いつながら「怖いよ。怖いよ」と心配している。若い頃、母との会話で「朝鮮に行く時、船の上で海を見た事があつたから、その経験からかね」といつていた。十五年に生まれた私が十九年三月父が徴兵され、やがて終戦をむかえるが、その三才半位迄の体験からだろうか。それとも地獄、極楽の話をよく聞いた経験からかも知れない。「夢占い」という方法もあるというが、そんな事迄したいとは思わない。

母の夢は一度しか見ていない。私は母に甘える子ではなく、心配かけ通しだった。父逝き後年老いていく母を近くで見えたので、大騒ぎする事なく自然に別れる事が出来た。「願わくば花の下にて春死なむと、藤の花の咲く頃往きたい」とよく言っていた。でも亡くなったのは八月真夏の時だった。願っていた季節とは全く違う時期で辛かったが半年も経ってから母に合った。

「ゆみちゃん一緒に飛ぼう。若葉が綺麗よ」姿は見えないが私の左側と一緒に並んで行く優しい声は元気な頃と変わらずに話が続いた。

「ゆみちゃん、気持ちがいいね。ふわふわしていて、ほらあつちもこつちも若葉でいきいきしているね」

山門から境内を埋めつくした木々は、一本一本

の若葉の色が美しい、自分の姿を確りと見せてくれている。若葉は黄緑とか緑などの一々二色ではなく、クレヨン十二色以上の色が、それぞれ若葉を表現しているのだった。大きい葉、形も色々、樹々の高さ低さも様様だった。若葉の一つ一つに見とれていると、もう母の気配も声も聞えなくなつた。人の想いが夢になるのだろうかと思いつながら彼此十七八年過ぎてもあの五月晴れの若葉を母と見た映像は今でも鮮明に残っている。

父の夢もあの時だけだった。七十二才で倒れて一週間気がつかずに亡くなった。急な別れだったので何かにつけ涙が出てどう仕様もなかった。畑に行つたか、小川へでも行つたかと姿を追う毎日だった。一ヶ月位した頃だったか父を見つけた。父は竹藪に沿って西の方に続く畑道の所に座つていた。

「お父さん、どこへ行つてたの」

「父ちゃんは一週間ばかり遠くへ行つてた。帰つてきたからもう行かないよ」

と言つた。顔色が悪く項垂れているので心配だった。陽射しも弱く冬の感じがする。日向ぼっこを二人でしていたがいつの間にか私は一人になっていた。遠くへ行つてきたと言つていたが、何処だったのだろう。それ以来父にも合わない。夢でもいいから合いたいと思うことはこういうことなのだと改めて思った。

蛇の夢を見るとお金が溜まるから、人に言っちゃだめだと聞いた。黙つていようと決心しても喋つてしまう。今もつてお金は溜まっていない。寝ている時、手を胸にのせておくと怖い夢をみるという。確かに得体のしれない物に追われ、逃げようとしても体が動かない、足が前に出ないという

夢は何度かみた。どういう現象だったのだろう。子育ての頃は初夢の準備で楽しかった。どの子にもよい夢をみせてやりたくて二日の夜は宝船を折り紙や絵に描いて七福神をのせて作つた。帆には、：

なかきよのおのねふりのみなめさめ

なみのりふねのおとのよきかな

と書いて枕の下に入れて寝かせたが、どの子も「一富士二鷹三なすび」なんてよい夢はみなかった、というのが定評だった。毎年続けていったが子供達の成長と共に自然消滅して夫に無理強いし、今は孫に受け継いでいる。遠い遠い日にお婆ちゃんから教わつた事だった。裏庭の大きな八つ手の細かい花が散つて地面を覆つていた懐かしい風景を、夢のように思い出す。

仕事と家庭の明け暮れの中の夢は苦々しい物ばかりだった。私の厳しい一面を出した夢、職場での遣り取り、先輩に懇懇と言ひ聞かせている姿に朝は職場の向こう重い足の毎日だったが、子供との係わりに励まされ、夕方家路へと心も弾んで帰り、のり越えていった。苦しい日々の中で、初恋の人の夢をみた事もあつた。

悲しい淋しい夢も何度みた事だろう。小さな家（当時の社宅だろう）を落ち着かない様子で出入りしている子供達の姿だった。どの子の顔はよくわかるが、無表情で薄汚れた衣服だった。家の中は何もなく、四方八方に出入り口があり、入つては出ていき、戻つて来ては去つていく。子供達が巣立っていった後、同じ様な夢を何度みた事だろう。充分コミュニケーションを取らなかつた所為かと考えられる想いを、夫と語つた日も何度かあつた。夢を物理的に考えたり分析したりする事は分か

らないが、私の場合は日々の出来事を感情的に感じる事が夢に現れているように思う。宇宙の大時計も刻々と動いている。その中で生きていく凡ての物も夢のように消えて行く。だから生きていく間の夢は希望でありたい。父や母が私達姉弟に託した様に、私も子供達に希望を渡してやりたい。私は明日やる事に、明日合う人達に希望を膨らまして行こう。そしてもう合う事の出来なくなった人達とは夜の夢の中で合えるように願って行こう。

【特別企画】

虚構と真実の谷間（最終回）

第七章 神話社会への潜入（2）

ところで、この話についてはもう一つのパターンと言うか古事記には載っていないが日本書紀には記載された物語があり、どちらかと言えば其の方が「三輪山神話」の本筋と思われている。勘ぐれば、神武天皇や崇神天皇に関わりのある大物主神の話は、実はその地域に後から入ってきて勢力を広げた大和朝廷の権威を高める為に付け足した話のように思えてならないのだが…。

崇神天皇が疫病退散を願って神のお告げを聞いている時に、施主の崇神天皇より先に神憑りの状態になったのは倭迹迹日百襲姫命である。古事記に依れば崇神天皇の祖父（孝元天皇）の姉か妹になるのだが年代的に合わず、崇神天皇以前の天皇の実在が疑われているから、身分は曖昧にして置いた方がよい。当時の大王（後の天皇）家の一員であ

り、主に祭祀を担当した高貴な巫女さんである可能性が高い。ヤマシイでは無くヤマタイ国の卑弥呼にも擬されている女性で、どうも当時の三輪山は現代の伊勢神宮のような太陽神祭祀の場であつたらしい。神武天皇や崇神天皇に纏わる話が伝わるのも当然と言えれば当然なのである。

さて、何しろ古墳時代のことであるから年代は曖昧にするしか無いのだが、その倭迹迹日百襲姫命が或る男性と結婚した。日本書紀には「…倭迹迹日百襲姫命を大物主命の妻と為す…」と書いてあるから、或いは天皇（大王）の命令で倭迹迹日百襲姫命が地元の有力者に嫁がされたのかも知れない。その頃の結婚形態は知らないが、平安時代を適用すれば男性が夜になると女性の許に通つてくる。倭迹迹日百襲姫命の場合も同じで「…其神常晝不見而夜来矣…」である。男女の会合は夜のほうが良いけれども顔が分らないと、もし明るい時に途中で行き会つても挨拶が出来ない。そこで或る日、倭迹迹日百襲姫命が「君は常に晝は訪い給わざるにより、御尊顔を拝し参らす術なし。願わくば今日こそ夜が明けるまで留まり給え。麗しきお姿を仰ぎ見んことを願ひ奉る…」つまり、馴染みの飲み屋のお姐さんが気軽に言うように「偶には顔を見せてよ！」と頼んだのである。

すると旦那さんこと大物主神が「そなたの言うことは尤もである。望みを叶えるため、明日の朝は箆笥（又は櫛箱）の中に入っているから開けてみるが良い。そのかわり、私の顔形を見て驚いてはいけない」と言った。不思議なことを仰せられると気にしながらも、望みが叶う嬉しさに倭迹迹日百襲姫命は夜明けを待った。顔の見えない旦那は暗いうちに帰り、間もなく夜が明け始めた。朝日

が昇ろうとする頃に箆笥（櫛箱）の前に立ち、胸をトキメカセながら引出しを開けてみると、そこには衣類を着る際に使う紐ほどの大きさの蛇がいた。蛇はキラキラと輝くように美しい色彩を放っていた。「驚くな」と言われてはいたのだが、これは無理なことで、倭迹迹日百襲姫命は思わず「あつ！」と小声で叫んでしまった。慌てて口を塞いだのだが間に合わない…。

これに恥じた大物主神は途端に人間の姿になり「そなたは私に恥をかかせた。吾もそなたに恥を見せん…」と叫んで忽ち空に舞い上がり三輪山の頂ぎに飛んで行った―良く考えみると、この話はおかしい。大物主神は人間の姿で顔だけ見れば良いので本性の蛇にまで戻る必要は無い。また誰でも旦那が蛇の姿になれば驚くのが普通であるから「あつ！」と声を上げたぐらいは恥をかかせたことにはならない。嘘でも幼稚な部類に入る。気の毒なのは倭迹迹日百襲姫命であり、婿さんが三輪山（三諸山とも言った）に帰ってしまったから失望と責任感とで自殺してしまつた。その時の自殺の方法と言うのが神武天皇の皇后となった比賣多多良伊須気余理比賣の生誕に纏わる怪しい話に似ていて、つまり女性の秘所を箸で突いて自ら生命を絶つたのである。従つて、比賣多多良伊須気余理比賣の話も三輪山神話の延長として聞き流した方がよいように思うのだが…。

土地の人々は倭迹迹日百襲姫の死を悼んだ。相手が神様であるから文句も言えず、その分、同情が集まって墓が築かれることになった。その頃に伝わって来たのが前方後円墳なのだが、何しろ日本で初めて施工する方式の古墳であるから工事の遅れが予想されたけれども「日（昼）は人造り、夜

は神造り：」と日本書紀に記録されたように、突貫工事で作業が進められたのである。これが三輪山麓に古代の道と言われる「山の辺の道」を挟んで築かれた日本最古の「箸墓古墳」であり、墳丘の長さ二七六メートルで全国に二〇万基以上ある古墳の中で規模が十一番目に大きい。被葬者が伝説では倭迹迹日百襲姫になっているけれども、学術的には崇神天皇（大和王権初代の王）のものとされている。因みに石岡の舟塚山古墳は墳丘長一八二メートルで四十六位、また規模第一位は大坂府堺市に在る大仙陵古墳（四八六メートル）で従来は仁徳天皇陵とされてきたが、近年は崇神王朝の次の應神王朝を継いで新王朝を起こした継體天皇（天皇）のものと推定されている。

古事記では継體天皇の前の武烈天皇は八年ほど天皇の地位に在ったが、子が無く大王家が断絶するので應神天皇の五代の子孫を探して来て皇位に即けた、となっていて治世の記事がない。しかし日本書紀では、此の天皇が法律に明るく違法には厳しく対処した、と言うよりも極めて残酷な性格で妊婦の腹を裂き、人の生爪を剥いで山芋を掘らせたり、髪の毛を筆り抜いたり、悪事の限りを尽くしたように書いてある。その為に家臣が国政を動かしていた。余りにも酷いので「上代王朝史」には「日本の大王では無く百済国の悪逆な王の記録が誤って日本の記録になったのではないか？」と言いつつしている。さらに昭和十年代の日中戦争が泥沼化していく頃に出された物語歴史書には当時の高名な学者の先生方が、日本書紀の記述に異義を唱えて「：紀には瓊末なる淫虐の内行を、年に係けて録したれども、一も信ずるに足らず。思ふに雄略（天皇）の比より大臣大連（おおむらじ）の

跋扈に従ひ、政治峻酷となり、帝（武烈）に至りて、ますます法を厳にせられしにより、残酷の君と言傳へしものなるべし：」として言い訳をしている。特高警察や憲兵に見つかると発禁の恐れもあるので予防線を張ったのであろうけれども、そうなるのと記紀全体が正しい記録では無いことになる。現代は良い時代で、書かれた著書を其の俚に紹介できるので有難い。

武烈には幸いにして子が無かった。愚劣（ぐれつ）と呼んだほうが良いかも知れない天皇（天皇）は治世八年で死亡しているが、殺されたことも考えられる：この時代の大王は朝鮮半島の故国（百済系と加羅系）の關係で潰し合いが有つたらしく特高警察を心配した先生方には安心するように言つて上げたいが、實在性には疑問が残りそう、欽明天皇、敏達天皇以降の蘇我王朝との關係、さらには中大兄皇子（天智天皇）の登場と、大王がようやく天皇として此の国に君臨するようになるまでの真相が見えない。

怪しい話から更に怪しい話に戻って「三輪山」は標高が四六七メートルの花崗岩などから成る美しい山で、山全体が御神体であり、大和国一の宮・大神神社として信仰の対象になっている。歴史の古さから言えば日本最古とも言える神社（神様）であり、古事記でも神武天皇妃や崇神天皇に関連するより遙か以前の大国主命や少名毘古那の神が活躍した時代に「国造りの相談役」として登場している。それこそ大和朝廷と称する「何処の誰とも分らない侵略者」が入り込んで来る以前に現地を支配していた先住民の親分でもあったのか。此の神社は大田田根子伝説に関わりがある「酒の神」「菓の神」「厄除けの神」として全国的に知られて

いるようで、酒造家が新酒を売り出す際に店の軒先に下げる「杉玉」は大神神社で受けるのだとか、拝殿前の杉林には御神体かどうかは知らないが、神様らしい白蛇がお住まいになっていると言うので今でも参拝客が卵をお供えすると聞く。崇神天皇が宮殿を置いたとされる水垣の宮も三輪山に近い。大和朝廷発祥の地なのであろう。

三輪の大神神社と酒との關係については日本書紀が次のようなことを記録している。崇神天皇の治世八年に、高橋村という集落に住む「活日（いくひ）なる人物を「掌酒（さかびと）」に任命して三輪神社に供える酒を醸造させた。暑いうちは発酵が上手く行かなかつたようで十二月になってようやく酒が出来た。そこで例の大田田根子に命じて三輪大神を祀らせた。この日、活日は手造りの酒を天皇（天皇）に献上して「：この神酒（みき）は我が神酒ならず、倭（やまと）なす、大物主の、醸（かも）し御酒、いくひさ、いくひさ」と歌った。その後、一同が宴を催して「うま酒、三輪の殿の、朝戸にも、出て行かな、三輪の殿戸を」と歌い、天皇も「うま酒、三輪の殿の朝戸にも、押し開かぬ、三輪の殿戸を」と一緒に歌いながら神殿の門を開いて出てきた。酒が貴重品であった古代では神に近づく為に陶酔状態となる手段として酒を飲んだらしい。その発祥地が大神神社なのである。大酒呑みを「蟒蛇（うわばみ）」と言うから蛇が酒に関わりがあって、三輪山に白蛇が棲んでいるらしい。酒が安易に飲める現代は蟒蛇が至る所に出没して事件を起こしている。

古事記には、崇神王朝の後に大和地方を抑えた應神王朝の女傑・神功皇后にまつわる酒の話もあり相手を持つて飲む酒を文字通り「待ち酒」と記

録している。その時の表現に「…息長帯日賣命(神功皇后)が待酒を醸(か)みて献(たてまつり)き…」とあり、これに対して忠臣の建内宿禰が「この御酒を醸(か)みけむ人は…」と歌っている。現代でも未開地では酒造りに此の方法が用いられているようだが、原初の酒造方法は米などを噛んで発酵させたらしい。勿論、若い美人が噛んだのであるけれども…酒は造るので無く醸(か)むすのである。あまり飲まないほうが良い…。

話が横道に逸れたが三輪山伝説に戻すと三輪大神は赤い矢になったり蛇になったりして美人の娘に近づいている。困った神様ではあるが、本体が蛇らしいので誰も文句が言えない。なぜ蛇なのか…蛇と人間との婚姻譚は世界中に広まっているのでその原因としては、民俗学的に農耕儀礼に関連して蛇の冬眠習性が、春になると降りて来て秋には山に戻って行くと考えられていた「山の神」の周期と一致していたからではないか―蛇又は龍を山の神、もしくは山の神の使者とする民間信仰が形成された…と専門の学者は説いて居られる。

そして水田耕作の技術が広まってくるに従って農耕に従事する人々を悩ませたのが蝮(まむし)の害であったと想像する。日本列島は清冽な水に恵まれてから早い時期に東北地方と九州地方の両方面から稲作が伝わったのであろう。しかし水田に適した場所は蝮の世界でもある。それを証明するように「常陸国風土記」行方の郡には次のような記事がある。

孝徳天皇の時代と言うから丁度、中大兄皇子がクーデターで蘇我王朝を倒した頃である。西暦で言えば六百年代の中頃に茨城、那珂両国から分け行方の郡を新設したらしいが、そこに古老が伝

える話がある…継體天皇の時代に農地を開拓した箭括氏麻多智(やはすうじまたち)という人物が居た―継體天皇(天玉)は日本一の古墳に埋葬されていると推定される人物で、西暦五百年代に朝鮮半島から渡来し崇神、應神の両王朝を継いで蘇我王朝の前に在った王朝の主である―箭括氏麻多智が蘆の茂った湿地帯を開墾して水田を造成したときに「夜刀の神」という蝮の親分が大軍を率いて(勿論蝮の大群である)押し寄せ妨害工作をした。その為に造成事業が進まなかった。夜刀の神の姿は蛇なのに頭にツノがあり、あらゆる手段を使って人間の進出を妨害したのである。

頭に来た箭括氏麻多智は完全武装をして武器を取り、家臣と共に蝮の大軍に立ち向かい斬り殺して回った。蝮軍が退いたので、其処に境界の杭を立て「此処から上は夜刀の神の領域として認めよう。然し、此処から下は人が耕作する田園であるから蝮が入る事は許さない。其の代わり今から後は私が夜刀の神を祀って子孫に伝えよう」と宣言をした。こうして多くの土地が開拓された。箭括氏麻多智の子孫たちは夜刀の神の祭祀を継いでいたのであるが、孝徳天皇の時代になって壬生連麻呂(みぶのむらじまろ)が、其の地に灌漑用の池を掘り堤防工事を行った。すると夜刀の神は約束が違うとばかりに現れて池の近くに在った椎の木に登り、蝮の大軍を集結させて抗議行動をした。是を見た壬生連麻呂は大声で「此処に池を掘ったのは人々の暮らしを助けるためである。何の神だか知らないが、人間の道理に従わない奴は許さない!」と叫び、集めた人々に「蛇は勿論のこと、魚類、虫類など、目に見える限りの生き物は悉く殺せ!」と命令した。是を聞いた夜刀の神は慌てて蝮軍団

を解散させ自らも姿を隠した。時代は人間社会が進んで蛇の地位を下落させたのである。この話は水田耕作に伴う蝮の害を比喩的に伝えるものと思われるが、蛇を神として懼れ敬った古代の人々の心理が理解できる寓話である。

夜刀の神に同情をする訳では無いが、同じ常陸国風土記には、蛇が神様として良い待遇を受けていた頃の貴重な物語が収録されていた。是までに述べてきた大和国三輪山を起源とする「晡時臥山(くれふしやま)伝説」と呼ばれるものである。伝説であるからいわゆる大和朝廷の東方遠征(侵略行動)に伴い日本各地に伝わった筈であるが、現代の歴史書や文学書に依る限り常陸国にしか残って居ないらしく、似た様な内容では肥前国風土記に「摺振(ひれふり)峯伝説」が有るぐらいで見方を変えれば、常陸国風土記にしか、記載されていないかつた…と言うことになる。他国の風土記にはバカバカしくて収録しなかったのかも思えるが善意に言うより独善的に解釈すれば、この怪奇伝説を伝えるに相応しい大和三輪山を連想させる山と、蝮又は一般の蛇類が生息し易く、かつ水田耕作地が豊富な地域が常陸国には多かつた…とも言えるのではないか…。

それと、もう一つ常陸国風土記は古来の伝承や古老の言い伝えを重点に収録したから、専門的には「芋環(おだまき)型伝承」と呼ばれる話が正確に伝わっていたのである。なお「芋環型」は平家物語や源平盛衰記にも取り入れられていると専門の先生は述べておられる。神様と思われる正体不明の男性の身元を確認するため、娘の親が糸巻に巻いた糸を使うストーリーである。ただし常陸国風土記にある話は、芋環型の変形とも言うべきも

のであり糸巻の替わりに「土器」が使われる。

これは個人的な推測だが、例えば後に国分寺の瓦を焼いたように此の近辺が土器の産地であった影響が有ったかも知れない。

この伝説は水戸市史にも石岡市史にも収録されておおり「ふるさと『風』」でも取り上げられているから、広く知られている内容であるが、常陸国風土記・那賀（なか）の郡には次のような記述がある。

茨城の里 此より北に高丘（たかやま）あり、名を晡時臥（くれふし）の山といふ。古老の曰へらく、兄妹二人あり。兄を努賀毘古（のがびこ）と名づけ、妹を努賀毘咩（のがびめ）となづく。時に妹、室に在りしに、人あり、姓名を知らず、常に就きて求婚（よば）ひ、夜来たりて晝去り、遂に夫婦と成り、一夕にして懐妊（はら）めり。産（う）むべき月に至りて、終に小さき蛇を生めり。明くれば言なきが若（わか）く、晝間は話さず、闇（くら）むれば母と語りき。ここに母も伯父も驚き奇（あや）しみ、心に神の子かと扱（おも）ひ、すなわち淨（きよ）き杯（つぎ）に盛りて、壇（うたな）を設けて安置（おき）しに、一夜の間（ほど）に、己（す）でに杯の中に満ちたり。更に瓮（みか）大甕（たいぼう）を易（か）えて置きしに、又瓮の内に満ちたり…。

成長が早いので何度も容器を替え、遂には大きな甕に入れたが間に合わなくなった。そこで母親が「そなたの成長が早いのは神の子の証しであるうからとても私の元では育てきれない。父神の所に行くべきである。（此処に居てはいけない）」と言った。蛇の姿をした子は悲しんだけれども承知して母の命に従う、と答えた。しかし、条件として道中が淋しいから子供一人を付けてください…と申し出たのである。そう言われても、山里の一軒家であ

るし、家族は蛇太郎クンの母親と伯父の努賀毘古しか居ないのであるから「それは無理」と断ったが人間の道理は通じない。さあ、大変！

爰（こゝ）に子（蛇）、恨を含みて事（もの）吐（い）わず。決別（わかれ）の時に臨（のぞ）み怒怨（いきどお）りに勝（た）へずして、伯父を震（ふる）ひ殺して天に昇らむとしき。時に母驚き動（さわ）ぎ、瓮（みか）を取りて投げしかば、神の子（蛇）に触れて昇ることを得ず、よりに此の峰に留まりき。盛れる瓮甕（みか）は、今、片岡の村に存（のこ）れり。その子孫、社を建てて祭を致し、相継ぎて絶えず。

伝説に苦情を言う訳では無いが、最後の傍線の部分が気になる。当然のこと「子孫」は努賀毘咩の子孫になるので、蛇神の子を生んだ女性が婿を迎えたのであろうが、怖い家に良く婿さんが来たものである。この話について専門の先生は、蛇を絶対的な神としていた三輪山伝説から少し時代が過ぎており晡時臥山伝説では「蛇を邪神」と考えるようになってきたものと推定されている。神々が絶対視されていた時代の「古代ロマン」が零落し、それでも地方の人々は神への崇拜を根強く維持していた為に、その落差を埋める目的で三輪山伝説に新しい要素を加えたのが此の話なのだ。

そういう貴重な伝説なのであるが、少し厄介と云うか情けないのは、常陸国風土記にある晡時臥山伝説の場所について、双方地元が本家争いをしていてることである。問題になる原因は常陸国風土記の晡時臥山伝説が「那賀の郡」に「茨城の里」の話として収録されていることらしい。さらに都合良く、などと言うと謹厳実直な学者の先生に怒られるかも知れないが古代に那賀郡であった場所と茨城郡であった地域とに如何にも晡時臥山らし

い山が存在し然も両方に同じ話が伝わっている。素人の私など「実に結構なこと」と思うのだが、何でも難しく考えると、そうはいかないらしい。対立するのは水戸市と石岡市である。

先ず「水戸市史」には「晡時臥山の説話」として蛇太郎の活躍？を紹介し、その場所として水戸の北西部、木葉下（あぼつけ）町から、笠間市、東茨城郡内原町（現在は笠間市内原）などにまたがる朝房山（あさぼうやま、標高二〇一メートル）を挙げている。そして古事記、崇神天皇時代の説話に基づくこの神話に雷神の性格を見せながら、さらに三輪神話の特徴と鹿島神宮との関係、水戸市に古墳が在る那賀国造・建借間命の関係にも触れている。なお、水戸市が「晡時臥山の説話」の場所としていいる一帯は、酒沼川上流の水源地であり、その付近一帯は現在でも公園化されて古代の雰囲気を留めているらしい。

次に「石岡市史」であるが最初から「晡時臥山は龍神山」という標題を掲げて闘志満々、那賀の郡に茨城の里が入ったのは常陸国風土記を再編集した際の誤りであり、茨城の郡・茨城の里にある龍神山に「晡時臥山の説話」が伝わったとして古代の里・郷・字などを根拠に正統性を主張する。

然し水戸の朝房山と同じく標高二百メートルほど在った肝心の龍神山が消えてしまったから、今では「石岡市史」の主張だけが空回りしている。

では本当のところ、どちらの説が正しいのであるか？無責任な意見かも知れないが、伝説と言うのは文字通り「伝わる」ものであるから何処にどう定着しようが「こうで無くてはならない」という決まりは無いと思うのである。温泉地の饅頭屋ならば「元祖」「本家」「本舗」が対立するのは

分かるけれども、伝説の場所は、それらしき雰囲気が残っていれば、何処に何か所あっても構わないであろう。問題は、それが大切に保存されているかどうかなので「饅頭屋」の論理だと不自然だが「那珂の郡にも茨城の里が在って嘯時臥山の説話が伝わっていた。(勿論、龍神山にも)」と考えれば済むことではないのか…。

素人考えの気楽さで、その様に納得していたのであるが常陸国の昔を探る唯一の書とも言うべき「新編常陸国誌」でも、龍神山麓に在る村上神社の項で「風土記・茨城郡条・茨城里の小蛇を生りし故事を挙げて、今片岡の村に存し、其の子孫社を立て祭りを致し相続絶えずと有り、此の古事は茨城郡茨城郷の事なるを、那珂郡茨城郷にまがひ傳わりたるものなり…」としていながら同じ著書の中で「嘯時臥山」の項目に水戸市郊外の朝房山を那珂郡茨城里に置き、さらに茨城郷としても朝房山の地域を挙げている。つまり貴重な歴史的資料であるべき著書も何れかを決めることが出来ないのであり、私が適当に「両者採択」を提案しても嘘つきとは言われないであろう。

神武天皇に始まる古代の人物像を探る目的で此の原稿を書き出したのであるが三輪山の神様に登場して頂いたため話が「蛇」に移ってしまった。早く終わらせたいのだが、蛇は執念深いと言われるだけに中途半端な説明では後の祟りが心配であるから、今暫く「大和三輪山」を発祥地とする常陸国風土記記載の「蛇神信仰本舗騒動」を続ける。私は昭和五十年代の初期に「常陸国風土記の史的概観」という本を手に入れることが出来た。入手の経緯を「日高見国考・後編」に書いたけれども、友人に紹介されて何気なく購入したのだが、現在

では入手困難な貴重な著書である。著者は常陸国風土記の研究を長年に亘って続けて来られた県立谷田部高等学校長・河野辰男先生で、当時の竹内藤男・茨城県知事が序文を書いている。この著書にも常陸国風土記に記載された「嘯時臥山の説話(蛇神伝説)」が詳しく述べられているが、水戸市説の朝房山近辺に残る古代の地名が詳しく検証されていて「龍神山」は出て来ないのである。

私は石岡に住んで居るが石岡生まれでは無い。都合が悪くなれば石岡を捨てても良かったのだが数年前に本籍を此方に移してしまっただけから簡単には逃げられず「…歴史的に貴重な嘯時臥山伝説は石岡に無関係…」とは言えなくなりました。そこで原点に戻るつもりで「常陸国風土記の史的概観」全編を再読させて頂いた。素人の分際で僭越ながら、この著書の特徴は当時の「郡」ごとに常陸国に入ってきた(大和朝廷の命令で来たのであろうけれども)氏族が推定されていることと、常陸国風土記の編纂に藤原宇合が関わったことから同族の多臣系中臣氏に対する深い思い入れを推測されていることだと考えた。

その様に勝手に納得して古代の常陸国を推測してみると嘯時臥山伝説の伝わり方が見えてくる。早い時期に常陸国へやって来た武将たち(俗説では日本武尊の評判が高いようであるが、その様な人物は居なかった…という前提)は、後代に奥羽地方を侵略した坂上田村麻呂のように朝廷として組織化された集団では無かったと思われる。

天皇(大王)から命令は受けたであろうけれども、有力部族が各個前進で常陸国に入って来た。余計な推測だが経費も自分持ちで、その代わり征服地の戦利品を頂く契約で有ったかも知れない。その

為に各地に残る伝説も其の地方に入って来た武将たち(氏族)が各個バラバラに同じことを伝えていた可能性は十分に考えられる。つまり嘯時臥山の蛇神伝説も、それを伝えた氏族によって各地に有って良いので、問題は伝説が大切にされたか否かであり、水戸市は現在も嘯時臥山の場所と話(怪談)を守っているということになる。

「常陸国風土記の史的概観」に依らせて頂けば(解釈違いが有ればご容赦を頂いて)古代常陸国の開発は先ず那珂川沿岸部の那賀郡から始められたと思われる。以下は私の勝手な想像であるが、現在のように関西地方から陸路で来る場合には「東海道新幹線」という観念は未だなく東京まで来て、やがて霞が浦や利根川などの祖先になる「水の王者・古東京湾」が行く手を阻む。水陸両用車が有れば良いが船だけでも困る。東海道ルートでは莫大な経費がかかったと思われる。(侵略して来る連中は少ない経費で来て、余計に持って帰ろうとするから始末が悪い)そこで予算が少ない遠征軍は、太古の時代からヒスイとか黒曜石などの流通経路となっていた中山道回りを利用した。山地を抜けて平野に入り下野国から太陽の出る方向に向かって来ると筑波山が行く手を阻むから笠間方面経由で那珂川上流地帯に達する。これが一般的な常陸国へのルートであった。少し時代が進んで古東京湾も退潮し陸路が開けると常陸国は東海道に属し、国府(石岡)が終点になった。

先に述べたように崇神天皇の第一皇子である豊城入彦命も、初期のコースから入って来て筑波山に行き当たったのであろう。迂回しようとしたのが好奇心から無理をして筑波山を越えたと思う。現在の恋瀬川沿いに下って来て龍神山付近まで来

たのだが当時は山麓一帯が巨大な沼である。沼の名残が柏原池として残っているが戦艦大和でもないと渡れないから諦めた。大沼に面した龍神山の麓に住む人々に「三輪山の蛇神伝説」を伝えて神を祀るように命じた。其の時に「三輪の神様」を「三輪神」と言っただが発音が悪くて村人は「むらかみ」と聞いてしまった。以後、其の地は「村上」と呼ばれ蛇神伝説が山に残った。村上山の東部に現在の石岡市街地となる台地が見えるのだが大沼と鬱蒼たる森林に閉ざされていたから豊城入彦命は諦めて引き返した。

年代的には豊城入彦命の少し後かと思われるが秩序正しく且つ各個バラバラに常陸国に入ってきた有力部族の動向は、有難いことに「常陸国風土記の史的概観」に詳しく記載されているので黎明期の常陸国が覗ける。先ず那珂川流域の那賀郡には藤原氏の祖になる多臣系中臣氏の一族が入ってきた。彼らは其処を拠点として行方郡、香島郡へと進み、やがて鹿島神宮を創建する。同じ頃に、物部氏は筑波郡から信太郡へと開拓してから中臣氏の圧迫を避けて久慈郡、多賀郡へ移る。其の際に一部が利根川を越えて祖神の経津主命（ふつぬしのおおかみ）を香取神宮に祀る。一方、早い段階から常陸国に目を付けていた出雲系の集団は先ず新治郡を開き、次いで後に茨城郡となる未開地が空いていたので、其処に進もうとしていたところ多臣系中臣氏が中央政界の株高を楯に割り込んできたので、仕方なく東北方面に退いた。本来の茨城郡は多臣系中臣氏が本拠としていた那賀郡に茨城郷として在り、やがて其の場所に茨城郡が作られた。茨城郡の範囲は時代により変更があったように、小原に在った政庁も全く違う場所に変えられ

てしまうのである。新興地として不動産屋が開発し売り出し中であつたのが豊城入彦命も狙いながら船が無いので諦めた現在の石岡である。

繰り返すと、那賀郡を開発していた多臣系中臣氏は現在の笠間市小原（旧・友部町）を支配地域の行政拠点として「うばらの里」と呼んだ。現在の県立中央病院から数キロ北で有り、その延長線上十キロぐらいの場所にあるのが晡時臥山とされる朝房山（標高二〇一メートル）なのである。小原（うばら）から転じて大茨（おばら）になり、それに城が付ければ茨城になる。付近一帯は茨城郷と呼ばれていた。朝房山には大和三輪山の蛇神伝説が伝えられ晡時臥山とも呼ばれるようになった。その中に大和朝廷の基盤が確立され地方に対する中央集権強化の必要が生じてくると政庁も「掘っ立て小屋」と言う訳にはいかず、場所も都からの便が良い所が望まれるようになる。

東海道と迄はいかなくても太平洋岸に道が付ければ船便の利用が普及して来ると常陸国内の政庁所在地も港の近くが良い。最も望ましい場所は常陸国風土記にも記された高浜であるけれども高浜には台地に古墳群が築かれていたし、古代の観光名所でもあるから、其処に官庁街を建設する訳にもいかない。クローズアップされたのが、かつて豊城入彦命が諦めた丘陵地である。多額の工事が掛かったかどうか、こうして茨城国造の新庁舎が石岡に設置されたのである。都合の良いことに当時は未開の地であつた石岡地区も茨城国内に在つたから名称も変える必要が無かつた。更に有難いことには小原から朝房山が見えたのと同じ方向にポツンと暇そうにしている山が在った。高さも同じで聞けば豊城入彦命が既に晡時臥山伝説を伝

えている。それをPRして大和朝廷の威光を知らせれば良い。こうして石岡市の歴史が始まると共に蛇神の子を主人公とした伝説が水戸（朝房山）と石岡（龍神山）に伝わることになった。

ところが、龍神山の場合は山から絶え間なく水が湧き出るため近隣の農民たちから「雨乞いの水の神」として信仰されるようになった。似た様なものだが、信仰の対象が水に馴染む龍になったので蛇が忘れられたとも考えられる。村上神社には仁和年間と言うから桓武平氏の祖として平高望が皇族の籍を離れた頃に「炎旱（ひでり）に祈るゝ雨乞い」記録があつたようなので早い時代から山の主は龍神に交代させられていたらしい。蛇神の晡時臥山伝説が粗末にされても致し方ない。長々と書きながら、最後には蛇神を失望させる結果になつてしまった。蛇だけに「じゃあね！」でお終いにするのも気の毒ではあるが、世の中が神話の世界から次第に人間が中心となる時代に移つてゆくのであるから諦めて貰う他は無い。

崇神天皇は東方十二道（十二か国）に征服事業を展開させたと古事記が記録しているので、蛇の神様に助けられながら近畿地方に定着した大和王朝は、この時代から欲を出して縄文時代を壊し始めた。それどころか、自分の母国である朝鮮半島にも軍事進出を始めたらしく、私が存じ上げる先生（医学博士で歴史研究家）のお説によれば、中国大陸への要路を確保するため高句麗（ここうり）と戦っていたらしい。そのことが広開土王碑文（こうかいどおうひぶん）中国吉林省に残る高句麗第十九代の王の碑に残っているそうである。日本だと歴史を石には記録しなかつたから権力者の都合の悪いことは削除が出来た。政治を良くする為には駄目だった政治家の

名を石碑に刻んでおくときよいかも知れない。また、文書に書かれたものでも中国や朝鮮で書かれたものは日本の都合など考えないであろうから真実が書かれるとは思わが逆に向こうの都合の良い嘘で書かれると困る。九州王朝説の古田武彦先生の著書である「失われた九州王朝」にも、向こう側の重大な疑惑と、その解釈について大きく触れておられる。

国際的では無かった古事記には海外派兵のことが記されていないが、日本書紀の崇神天皇記事には任那（みまな）国から海を渡って使者が来たと言われているから、神様頼みだった大日本帝国もこの天皇（大王）の時代から、ようやく人間社会になってきたのである。一説では大陸の騎馬民族出身とも言われる崇神天皇であるから、近畿地方に満足しては居られず、既に述べたように長男の豊城入彦命を関東に派遣したり、母国の朝鮮半島にチヨツカイを出したりする。そして当然の発想とは思わが、九州から出てきて近畿地方まで抑えたから其処から先が気になって仕方がない。古事記や日本書紀に依れば、崇神王朝は間もなく侵略行動を開始するのである。

治政十年の夏、崇神天皇は甲子園球児を真似て全国制覇を思い立ち、先ず（おおびこのみこと）を北陸地方に派遣した。この人は崇神天皇の伯父さんぐらいに当るらしい。その娘が次の垂仁天皇の皇后になつてゐる。軍勢を率いた大毘古命が飛鳥の都を出て京都付近に差し掛かるときにスカートをはいた少女が都からの街道にある坂に立ち止まり大声で歌をうたった。その歌詞に「御真木入日子（みまきいりひこ）」という崇神天皇の名前が何度か出てきたので、大毘古命は不審に思い少

女を問い詰めた。少女は「私は只、歌つただけ何も言うことはありません」と言つて姿を消した。歌の意味は「自分の命が狙われているのを知らないのか；御真木入日子（崇神天皇 よ！）」という過激な内容であつたから、大毘古命は気になつて都に引き返し天皇に其の事を報告した。

古事記では、その報告を受けた崇神天皇が何の事実確認もせず、何の証拠も無い俣に京都郊外に役人として赴任している叔父の建波邇安王（たけなほにやすおう）が謀反を起こした！と断定し、直ちに大毘古命と日子国夫玖命（ひこくにづくのみこと）に兵を与えて討伐を命じたことになつてゐるが、日本書紀には先に述べた箸墓古墳の主である倭迹迹日百襲姫が神憑りをして天皇への謀叛を予言したと記録されている。倭迹迹日百襲姫が結婚詐欺にあつて自殺をする数年前のことらしい。嫌味を言う訳ではないが、謀反を察知する能力のある女性が、自分の結婚相手の正体を見抜けないと言ふのは物語として欠陥がある。それはともかく建波邇安王の奥さんは吾田姫（あたひめ）と言つて夫と共に崇神天皇に対抗している。蛇には騙され易いが、この時代の女性は「男女機会均等社会」を実現していたのである。

建波邇安王だけで無く、その女房にまで馬鹿にされた崇神天皇は頭にきた。実はその前に、崇神天皇が聖地としていた山に吾田姫が登つた。お参りに来たと思つていたのだが、その時に吾田姫が密かに霊山の土を風呂敷に包んで持ち帰つたのを天皇の家来が目撃してゐた。銀座では無いから土一升が幾らと言ふことは無いのだが、聖地であるから家来が気にして天皇に密告してゐたのである。疑心暗鬼のところへ「謀反」を告げられたので直

ちに討伐軍が派遣されることになり、二人の将軍は土器を据え神に戦勝の祈りを捧げてから出陣をして行つた。軍勢が奈良から京都に進み木津川に差しかつた時に、建波邇安王の率いる兵が待ち構えていた。崇神天皇というか倭迹迹日百襲姫の予測的中したことになるが、話としては出来過ぎてゐる。崇神天皇の即位に不満のある豪族が各地に居たことが窺われる事件である。

蛇でも蛙でも神様を介して物事を決めていた時代には神威を懼れて周囲の者が不平不満を爆発させることは難しかったが、神を離れ独立して天皇（大王）として権力を持つ者は勢威の拡大と共に逆に其の椅子が敵に狙われ易くなつたのである。極言すれば誰が天皇になつても良い時代であるから他者が納得する存在認識、今風に言うといデンテイデーを準備しておく必要がある。後は武力で押すしかない。

両軍は川を挟んで戦鬪を開始した。敵が挑んで（いんどんで）来たので、其処を「いんどみ」と言うようになつたとか、誰が決めたのか戦鬪を開始する前には両方の陣から同数の代表者が出て相手に矢を射掛けた。此の場合、音を立てて飛ぶ鏑矢（かぶらや）が使われる。つまり合戦を意味する儀式的な「矢合わせ」であり、源平合戦の頃までは行われていた記録がある。木津川を挟んで日子国夫玖命が建波邇安王に「先ず其方から忌矢（いらいや）を放て！」と言つた。建波邇安王は天皇方の陣に向けて矢を放つてきたが、誰にも当たらなかつた。そこで日子国夫玖命が返しの矢を射ると、この矢が建波邇安王に命中して瞬時に絶命した。

敵方は是を見て一斉に逃げ出したので直ちに総攻撃が開始され、天皇に歯向かう軍勢は全滅させ

られてしまった。勝った方は「皇軍」と名乗った。調子の良すぎる物語であるが証拠が無いから嘘だとは言えない。ただし、この後の話は嘘であろう。

木津川の合戦に勝利した大毘古命は、当初の予定どおり北陸地方を回った。そして息子の建沼河別命（たけぬなかわわけのみこと）は伊勢国から始めて尾張、三河、遠江、駿河、甲斐、伊豆、相模、武蔵、下総、上総、安房を経て常陸国に入りさらに陸奥の国へ回った。太古の東海道新幹線、つまり都から石岡迄は元気の良い馬で飛ばして来て、其処から先は鈍行の駄馬に乗って行くコースが出来たのであろうか。建沼河別命は北陸地方から来た父親の大毘古命と猪苗代湖西方の会津で合流したと言う。親子が行き会ったので其の場所を「会津」と呼ぶようになった、と古事記は伝える。

この話が真実ならば、先に述べた多臣系中臣氏や物部氏、さらには出雲系氏族の人々が常陸国に入って来た時期、行動などとの関係が気になるところではあるが、冷静に考えると東海道十二か国の遠征制圧が戦争経験も浅い建沼河別命の力量で簡単に出来る訳が無いのである。これは建波邇安王の反抗を収めてくれた大毘古命一族に箔（はく）をつける物語だと言わせて貰いたい。崇神大王の時代に日本全国がほぼ制圧され、大和朝廷の支配下に入ったと言いたいのであろう。そして大王は「天皇」を称することにした。初代天皇である。ただし天皇を称したのは天智天皇か天武天皇以降とする説もあるようだが、ここは目を瞑（こげ）っておくことにする。建波邇安王反乱討伐の記事で古事記の崇神天皇編が幕を下ろすことになる。

古事記も日本書紀も崇神天皇の後は、昭和二十一年まで日本国民に押し付けてきた歴史で歴代天皇

として「垂仁、景行、成務、仲哀、應神、仁徳、履中、反正、允恭、安康、雄略、清寧、顕宗、仁賢、武烈、継體、安閑、宣化、欽明、敏達」と続き、その後は「用明女帝、崇峻天皇、推古女帝」に至る。「推古天皇 妹豊御食炊屋比賣命（いもとよみ）けかしぎやひめのみこと、小治田の宮にましまして、三十七歳（みとせあまりなとせ）天の下治めらしめき」：「本当の混乱はこれからののだが、太安萬呂はそれを予測できないか、或いは都合が悪くて無視したのか、此処で古事記の記録が終わっている。

何年前であったか、奈良市郊外の茶畑から太安萬呂の遺骨が出土した——土地の所有者が発見してくれたというニュースがあった。奈良時代の国策に沿った大事業を成し遂げながら、凡そ千三百年間も無名の俣でモグラと暮していたのは気の毒であるが、日本という国家の誕生に関わる記事を夢物語で捏造した此の人物は凄い。考古学、歴史学などが画期的に進歩した現代では、日本の古代を支配していたのが百何代も続く天皇では無いことが分かっていくけれども、嘘も何度か精製していくうちには、小さくても真実の結晶がみつかる。

先に述べたように犬の社会でも組織化されることとがあるので集団で人が住み始めれば、良く言えばリーダー、悪くてもボスの存在が必要になってくる。縄文時代にはどういいう組織が有ったのか知りようが無いけれども、大和三輪山に蛇の神様が頑張っていた頃からのことは太安麻呂や藤原不比等のお蔭で物語が伝承されている。しかしながら民主化以前の日本では歴史が神様から出発していたから人間社会のことも上流階層のことは霞がかかって明確には分からなかった。それならば川の上流に住めば良いという問題ではない。

戦後は多くの先生方が真摯な研究を進められて出雲王朝や九州王朝などの存在、さらにはそれら先進王朝が衰退した後に起こった王朝などが、先に述べた中国及び朝鮮との関係から興亡があつて近畿地方に定着した大和王朝では初代・崇神天皇——應神天皇——継體天皇：その後に安閑、宣化、欽明と続く系統にも何らかの対立抗争があつたと見られている。その後は蘇我一族が皇位に就いたと思われるが、古事記・日本書紀ともに敏達、用明、崇峻、推古と蘇我系の天皇が記録されているだけである。崇峻天皇の時代に蘇我氏と物部氏との対立が激化して戦闘が行われ多くの犠牲者が出た。崇峻天皇も蘇我馬子に暗殺されている。

それにより異母妹の推古女帝が即位を強いられ伝説の聖徳太子の時代が到来する。推古天皇は敏達天皇の後添えに入っていたため、嫌です、と拒絶したのに政略的に担ぎ出されたのである。推古天皇は皇太子を立てずに亡くなった。天皇の地位が危険なものであることを知っていたのである。嫌な役目を押し付けられたのは、太安麻呂に見放されたというか、古事記の記録から除名された舒明天皇である。即位前は押坂彦人大兄皇子（おしき）かのひこひとおおえのおうじ）と言い、敏達天皇の孫に当たるのだが、この天皇の即位を巡り、有力豪族の間に水面下の激しい葛藤があつた。

舒明天皇は在位十二年程で五十歳に届かずに亡くなった。皇后は舒明天皇の異母弟の娘になる寶皇女である。皇后との間に生まれたのが中大兄皇子、間人（はしひと）皇女、それに大海人皇子と言われてきたが、近年の説では大海人皇子の母親は蘇我氏の娘とも言われる。そうであれば大化の改新を仕出かした中大兄皇子に恨みがあり、壬申の

乱で敵を討った、とも考えられる。そう言うことがあるから太安麻呂は古事記を中途半端に打ち切ったのかも知れないし、藤原不比等は自分の身内に都合が良いように日本書紀を編集した。

寶皇女は皇極天皇として即位した。即位した年齢が舒明天皇の亡くなった年齢と同じぐらいであったけれども、政治の主導権は蘇我氏が握っていたようで、在位中に「大化の改新」という暴力革命が起きた。この事件は一般的には中大兄皇子と中臣鎌足の主導で行われたとされているが、近年は研究が進み「大化の改新」をテーマに次々と新しい説が提起されていて単純なクーデターではなさそうである。暗殺の首謀者も思いがけない人物になる可能性もある。天皇制国家日本が誕生する時期であるから、神武天皇が他力本願で九州から出掛けて来た頃のように神様は当てに出来ない。

いずれにしても大化元年（六四五）六月十一日（事件の後、年号は白雉元年に変わる）朝鮮半島からの献上品を受け取る儀式にかこつけて大極殿内の聖なる場所^所で日本を根底から変える惨劇が展開された。蘇我入鹿の暗殺は皇極天皇の目の前で行われ、事情を知らない女帝は恐怖に曝されたことになる。忠義論から言えばほどの不忠は無い訳なのだが、戦前戦後を通じて中大兄皇子と藤原鎌足を「不忠者」とした歴史書は見当たらない。これが日本最大の「嘘」であると私は思っている。

日本書紀には、先ず足を斬られた入鹿が血を流しながら天皇の御座に倒れ込んで「私は天子の家臣です。なぜ、この様な目に逢うのか罪を知りません。教えてください！」と頭を床に叩きつけて叫んだ、と書いてある。怪我人を目前にしたら救急車を呼ぶのが先であろうけれども、気が転倒し

ていた天皇は中大兄皇子に「所作、何事か有する耶（何でこうなるの!）」と聞いた。中大兄皇子は平伏して「入鹿が天皇家を滅ぼし皇位を奪おうと企んだからです」と説明をした。嘘つき!

しかし殺人行為の途中で忙しい。幾ら天皇から聞かれても説明している暇は無い筈で、この場合は皇極天皇のほうに耐えられずに逃げ出したようである。暗殺の当日は天候が崩れ、斬られた入鹿の遺体は降りしきる雨のなか屋外に放り出されていたので誰かが障子を被せたらしい。当時は未だシートが無かったから仕方ないが障子では直ぐに濡れてしまつて何の役にも立たない。

大化の改新の目的というか、蘇我氏を除くのはその頃に中央政権が目指していた律令制度の推進に蘇我氏が反対をしていた為とされてきた。そして蘇我一族が悪人であり天皇をないがしろにして来た、とするのが従来の歴史であった。鬼が島征伐理論で一方的に蘇我氏が悪者だったのである。

しかし戦後の歴史観では討たれた蘇我氏よりも、討つた人物に問題が有るとされている。一説では遡つて應神大王（天皇）の系統を継ぐ用明天皇系蘇我王朝の存在と、これに対する継體大王（天皇）系統を護る舒明天皇系の暗黙の対立なども推定されているのである。その他、諸説があるけれどもどの説が真実なのかは簡単に結論づけが出来ないと思われる。つまりところは権力争いであり強引なクーデター説が広まることになる。

蘇我入鹿が討たれた翌日には入鹿の父親である蝦夷（えみし）の屋敷に予定どおり中大兄皇子らの軍勢が押し寄せ蝦夷は討たれた。屋敷には火が放たれ蝦夷が所持していた「天皇記」と「国記」が燃え出したのである。これを見た船患尺という物

差しの様な名前の人物が、焼けかけの本を踏み付けて火を消した。中大兄皇子の家来であろう。「国記」のほうに焦げながらも何とか読める程度で回収できたが「天皇記」は完全に灰になった。

天皇記が完全燃焼したので大日本帝国の出来た経緯は闇になった。それ以後の朝廷には都合が良かったのか？そして焼け残った「国記」を手本にして政治が行われるようになったお蔭で日本は何となく焦げ臭い政治が伝統のようになり現代まで続いているのである。天皇記は従来の天皇の存在を隠す為にならざと燃したのかも知れない。高位高官であったとしても、国記と天皇記が個人の屋敷に置かれて居た—このことから蘇我一族は、当時の天皇家であり、その皇位を奪うためにクーデターが起こされた—という説が起こるのは至極当然に思える。しかし、そう言う議論が起こつた、と言うか、大胆なことが言えるようになったのは極く近年のことである。

現代でも蘇我入鹿、蝦夷父子を横暴な権力者として歴史書があるけれども、例えば皇極天皇の元年に当時は蝦夷（えみし）と呼ばれていた人々の代表が貢物を持って都へやって来た。此の時にそれらの人々を蘇我蝦夷（えみし）が接待をしている。横暴な権力者が被征服民として卑下される立場の者と同じ名前で接するなど有り得ないと思うのだが：また当時の記録で、日照り続きの際に雨乞いを行ったところ蘇我氏の祈禱では少しの雨しか降らず、皇極天皇の祈禱で大雨になったという記事もある。是などは故意に蘇我氏を貶した悪意の記事であろう。そして逆賊として討たれた蘇我入鹿、蝦夷父子は、数日後に墓を築いて埋葬することが許されている。

これらのことは記録に残されているから嘘では無い筈なのだが、その記録が嘘ではないという証拠も無いのである。なぜならば日本の歴史は紙に書かれたものである。ヨーロッパなどに紙が伝えられたのは極く近代らしいから、それだけ早く紙が伝わっていたことは自慢できるが、経費を惜しまなければ書き換えが出来る。庶民など文字には縁が無かったであろうから、証拠書類を見せる必要もなくて結果だけ伝えれば良い。

ところで、古代オリエント諸国のように石や粘土板に記録されたものは改竄(かいざん)など容易には出来ない。冒頭に述べたアケメネス王朝ペルシア帝国の中興の祖とも言うべきダリウス一世は、自分の功績を僻地の山中、地上七〇メートルの絶壁に記録した。それも古代ペルシア語、アッカド語、エラム語という当時の国際公用語全部を使って彫らせている。アッカド語は紀元前二千年代から数千年間に亘って使われた楔(くさび)形文字で書かれた言語でセム系民族に使われ、エラム語はアッカド語から発展して絵文字や線文字が含まれた楔形文字の言語のようであり、ペルシア語はアラビア文字の変形で記録される。

現代でも拝見するには危険と労力が伴うダリウス一世の周到かつ国際的で馬鹿げた功績は誰にも消されない代わりに誰にも読んで貰えなかった。二千数百年経って英国軍人で外交官で学者のローリンソンが危険を冒して崖を攀じ登り(よじのぼり)解読してくれたお蔭で、偏屈男ダリウス大王が有名になった。碑文のある場所はイラクとの国境に近い山地と砂漠地帯の接点に位置する。驚くのは崖の高さもだが、紀元前五百年当時に国際間で通用する言語と文字とが三種類も在ったという事実

である。その頃の日本は幻の神武天皇以外に神様と蝮(へび)ぐらいしか知られていない。

人類が楔形文字を発明したのは紀元前三千年より以前であるとされている。歴史に登場する最古の民族とされるシュメール人が都市国家を築いていたことは知られているが、その遺跡からは粘土板に彫られた歴代王様の名簿も発見されている。

これは改竄(かいざん)も難しいから当時のことが推測できるのである。尤もダリウス一世のように心配し過ぎて誰も読めないように記録したのでは何の為なのか分からない。古代エジプトの歴史は学のある書記が記録していた。書記以外には読むことも書くことも出来ず秘密は保てたのだが後世には読める人間が居なくなつて王朝の歴史は口伝だけになり中身が全く分からなくなつた。クレオパトラ時代のギリシア系王朝がヒエログリフと民衆文字とギリシア語の三種類で彫つた石碑を残してくれたのだが、粗末にされアラブ時代に要塞工事の石垣に転用されていた。それをナポレオンの軍隊が陣地構築の現場で見つけて貴重なものと分かり、シャンポリオンという学者によって碑文が解読されたことから絵文字ヒエログリフが読めるようになり、エジプト王朝の古代史が明るみに出たのである。これには誤魔化(ごまか)しはない。

紙に書いた歴史の場合には、武烈天皇の記事に心配した学者の先生方が居られたように弱い民衆は権力におもねり、権力を握つた者が自分の都合の良いように記録を改竄しようと思えば幾らでも出来るのである。極言すれば歴史は真実と嘘から成り立っている。その嘘も極めて巧妙に、恰(あた)かも真実であるかのように記録されている。これは個人的な印象かもしれないが主人公に都合良

く書かれた歴史は裏があると考えるべきである。そして古事記の言い草では無いが人間が代々に亘つて口承で伝えてきたことには意外と真実が隠れているかも知れない。そのことを考えると「歴史を知り過去を学ぶ」という場合には、先ず幾つかの説を伺い、多くの著書を読ませて頂き其処に書かれていることから共通する記述、或いは相反する記述を探りだして、自分はこの様に思う…というラインを設定すべきなのである。そして何よりも「歴史は勝者の記録」である―敗者の歴史も有る、と言うことを忘れないようにしたい。

歴史の嘘をテーマに「虚構と真実の谷間」として拙い文で長々と書き続けてきました。この章をもって閉じさせて頂きます。しかし、歴史は日々作られてゆくので終りは無い筈です。嘘と真実とが絶妙に絡み合った「嘘」を探してこれからも書き続けてゆくつもりです。お読み頂くことに深く感謝申し上げます。(完)

【風の談話室】

新しい年の1月号を無事発行することが出来た。今年も、当云報も100号を迎える事となる。その年の1月号が無ければ、その年の12月号を迎える事は出来ないし、通巻100号は始まりの1号が無ければ100号にはならない。至極当たり前のことなのであるが、意外に始まりの一步のことを忘れてしまつたようである。始めの一步のことを言おうとすると、自分の中に

そんな安っぽい感傷は「免だ」という声が聞える。しかし、始まりの一步があるので十歩、百歩の足跡が残るのである。

そんな風に考えると、その年の始まりである1月号を先ずは無事に刊行できることはおめでたい事であり、嬉しい事である。

通巻100号は9月号なのでまだ先の事になるが100号を記念しての何かの行事はしなければいけないかな、と思っている。

創刊号は、2006年6月に7名でスタートし、途中2名が退会した。その後また2名が入会しスタート時の人数に戻ったが、それ以上の入会者がいないことは些か淋しいところである。

しかし、「投稿いただだける人は毎年増えてきている事は嬉しい限りで、それこそが当会報の継続の最大の成果と言える。

《二十一言・もう一言》

序列闘争の恐怖

菅原茂美

暮れには北朝鮮で、「骨肉相食む」粛清の惨劇が演じられた。崩壊寸前のがきと見える。将来、現王朝を転覆しうる「芽」は、早々に摘み取っておくということなのか。日本でも戦国時代、同様の歴史はあったが、今、民主主義の時代に、このような想像を絶する死闘が繰り返されているとは…。

このような現象を、「生物の進化」という観点から検討してみたい。ほぼ40億年前、この星の浅い海の底で生命は誕生した。最初は1個の単細胞で

あった。最初、この物質の塊は、膜をかぶり、周りから栄養となりそうなものを引き込み、不要なものは排出して新陳代謝を行い、更に、自分と同じものをコピーする機能を獲得し、増殖を繰り返して、仲間を増やしていった。自分や同種の生命を維持するためには、他の栄養になるものなら何でも奪い取るシステムが定着する。これが利己的な遺伝子の発祥である。全ての生物はこの単細胞の子孫であり、己の生存のため、無限に欲望を広げていく。仲間同士でも、より強い者がより生存の確率を高めていく。序列のより上位の者が、より安定的に子孫を残していく。

人類がいかに高尚ぶっても、この原則は変わらない。動物の生存競争を見るにつけ、この原理が厳然として定着している事を認めざるをえない。人間様も他の動物となんら変わらない「欲望特急列車」なのか。

国分寺の始まり？

打田昇三

どうでも良い話だが国分寺・国分尼寺建立の詔が出されたのは聖武天皇の天平十三年三月二十四日では無く二月十四日である…とする説がある。「続日本紀」の誤記らしいのだが、一番遅いところでは寺院完成までに五十年もかかっているから十日や二十日は間違いに入らない。それに気を良くした訳では無いと思うが天平十三年が実は天平九年(七三七)である…とする説もあり其の根拠は次のような事項が年内に起こったことによる。

①天平九年は疫病の流行に加えて全国的な凶作が続く国家、国民が疲弊していた。

②疫病により、聖武天皇が頼りにしていた藤原一族の房前、鷹、武智鷹、宇合などが相次いでこの年に死亡している。

③日本海の領土である老岐、対馬が朝鮮半島の勢力に侵略される危機に直面していた。

④五月に日食があり、異常気象で雨も降らず田植えも出来なかったから天変地異と認識された。

⑤聖武天皇は有名な神社にお願いしたが効果が無く、宮中に七百人の僧侶を集めて祈ったがダメで強制的に四百人を僧侶にさせても無駄だった。

地方には強引に頭を剃られた気の毒な犠牲者が何百人も居たから、その者たちの就職先として諸国国分寺を建立せざるを得なくなった…。

⑥は信用され難い話だとは思いますが僧侶の大増員は記録に残るから史実であろう。

《こつば座だより》

新年おめでとういれごます

小林幸枝

新年おめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願いいたします。

去年は、念願であった東京公演が実現し、大変有意義な年となりました。特に、ヨネヤマママコさんの舞台創りを目の前に勉強させていただき、舞台表現の厳しさ、自己責任の大きさを知る事が出来ました。

今年も、東京公演での衣装を担当して下さった熊谷敬子さんと、今度は朗読と舞での共演が決まり今からワクワクしております。

熊谷さんとの舞台は、5月に熊谷さんのお住ま

いである札幌で第一回が行われ、その後6月のことば座定期公演で共演することとなりました。

演目は、東日本大震災で宮城県気仙沼であった実際の体験談を熊谷さんが書き起こした「かがり舟」を熊谷さんの朗読と私の舞がコラボレーションするという舞台です。

今年もまた新しい事に挑戦でき、その場を頂きましたことに感謝です。頑張つて精進してまいりますので、どうぞよろしくご声援頂けますことお願いいたします。

今月号で打田兄の長編歴史物語「虚構と真実の谷間」が完結し、来月号からは「平家物語」の打田私訳を掲載してまいります。平家物語は全十二巻からなるもので、この平家物語に打田史学としての思いやきえを加筆した、石岡にとっては非常に意義のある物語の私訳となります。

ただ今、巻三の私訳に入った所ですが、「ご期待ください。

ふるさと風の会では、皆様のご投稿をお待ちしております。毎月25日が締め切りです。2月号は、2月8日発行の予定です。

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaze.com/>

明けましておめでとうございます。

ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える仲間」を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさと自慢をしたいと考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。(会報印刷等の諸経費)

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平 智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

ふるさと風の会 <http://www.furusato-kaze.com/>

《ふるさと》

アレンジ料理・書道会・書道会・料理のお話です。

(キター文化館通リ)

看板娘(大)「しらしら」ちゃんか

ぜひお話を聞かせてください。

電話 0299-24-0000

ことば座「朗読教室」受講生募集中!!

朗読は演劇です。このことを忘れて、スラスラよどみなく標準語で読むものだと思いませんか。

朗読は、物語を読み聞かせるのではなく、声に劇しく(はげしく)心を演じることです。

物語とは、はじめに言葉があって紡がれたのではなく、はじめに作者の心があって言葉に紡がれたものです。物語(詩)を朗読に表現する時は、言葉に紡がれた作者の心の真実をうけて、表現者として劇しく(はげしく)そのドラマ(物語)を演じることが必要です。

自分達の住むふる里を表現し、ヨイショしていく手段として、朗読は最も適したものと言えましょう。

演劇表現としての朗読の基礎を学び、朗読表現で「ふる里の歴史・文化」をつたえて行きたいとの思いのある方、連絡をお待ちしております。

月二回程程度の授業を考えております。(受講料月額3,000円)

ことば座の脚本・演出家:白井啓治が丁寧に指導します。

連絡先 080-3125-1307(白井)